

## 武蔵野赤十字病院

〒180-8610  
 東京都武蔵野市境南町1-26-1  
 TEL 0422-32-3111  
 季刊 情報誌

## Eye むさしの



国友会文化祭出展作品、白馬大池、チンダルム、職員撮影

## 小児看護専門看護師

オレンジ4階病棟 尾高 大輔



近年の急速な少子高齢化に伴い、核家族化の進行や地域社会での育児体制が十分に機能できない現状を迎えています。衣食住全てにおいて子どもを取り巻く環境が大きく変わり、世代ごとの価値観にも大きな変化が生じてきています。子ども自身の体力の低下、氾濫する情報に影響されるコミュニケーション能力など、自分たちが育った時の考え方でうまく適応できず、子育てに悩む家族が増えています。そのような状況で、子どもが病気になる病院にかかることになると、子どもだけでなく家族に与える影響は非常に大きいものになります。

現在は、生後間もない子どもからご年配まで様々な方が入院している病棟に勤務し、病棟保育士や院内学級教員、ケースワーカーと協働しながら、子どもと家族が安心して入院生活を送れるようスタッフと一丸となり頑張っています。また入院病棟だけでなく、小児科外来や救急外来のスタッフ、他職種の方に協力していただきながら、様々な健康状態にある子どもと、不安を抱えながら子育てをする家族への支援に貢献できるよう活動を進めたいと考えています。

さらに、子どもの入院をどのように同期に伝えるか、大きな病気を患ってしまった親御さんが子どもにどの様に接したら良いかなど、家族の病気とかかわる子どもへの支援も一緒に考えていきたいと思っています。

## プレおばあちゃん教室

日時：平成26年7月16日（水）、9月17日（水） 13:00～15:00

場所：母子保健相談室

受講料：お一人 3,000円

講義：「最近の育児について」

- ・赤ちゃんの沐浴、お世話の仕方
- ・実物大の赤ちゃんのお人形を使って沐浴実習を行います。



お申込およびお問合せ：産婦人科外来

## 糖尿病教室

場所：山崎記念講堂 時間：13:00～15:00 受講料：500円（当日支払い）

日 時	13:00～14:00	14:00～15:00
7月5日（土）	糖尿病の新しい治療 菅野一男（男の内科院長）	糖尿病と整形外科疾患 小久保吉彦（整形外科部長）
9月6日（土）	糖尿病と心疾患 山口雅雄（循環器科）	糖尿病と付き合う 森池陽子（臨床心理士）

申込およびお問合せ：医療社会事業課（内線 7111）栄養相談室（内線 5292）

## 基本理念

- 病む人への愛
- 同僚と職場への愛
- 地域住民と地域への愛
- 地球、自然、命への愛

## 基本方針

- （1）患者・家族から信頼される安全な医療を提供します
- （2）地域中核病院としての機能向上を図ります
- （3）地域の医療機関・行政と連携して市民が安心して住める地域づくりを進めます
- （4）質の高い医療を提供するため、安定した病院経営を継続します
- （5）働きがいがあり、成長を実感できる職場をつくります

## スマホと対人関係における心理



心療内科・精神科  
臨床心理士 池田 美樹



最近、公共の場でスマートフォン（多機能携帯電話、通称「スマホ」）やタブレット（携帯情報端末）などの電子通信機器を使用している人を多く見かけます。世帯普及率では、スマホが54.7%、タブレットが20.9%、そして携帯電話とスマホを合わせた携帯電話全体は93.2%の高率です（内閣府消費動向調査、平成26年3月）。スマホは、携帯電話機能に加え、インターネットを用いたWebサイトの閲覧、オンラインゲームなどもできます。「LINE（ライン）」に代表されるコミュニケーションアプリを使うと、無料通話やメールで会話を行うチャット機能なども使えます。即時に発信・返信ができ、スピーディなやりとりが楽しめる点も含め、その利便性は誰もが認めるところです。しかし、それらの弊害について実感されている方も多いのではないのでしょうか。

対人関係における心理学的観点からみると、「即返信が当たり前、すぐに返信するべき。」といった考え方が作られやすい環境であることがあげられます。このような考え方を持っていること、相手からすぐに返信がこないことに対して、「自分のことを嫌っているのではないか」と受け止め、不安や怒りを感じ、相手を責めるといった攻撃的な行動につながることもあります。一方、逆の立場では、すぐに返信しない自分に対して、罪悪感が生じやすくなります。そして、不快な感情や攻撃を避けるために、常に着信に注意を向け続けるといった行動が形成されることにもつながります。さらにこうした行動は、いわゆる依存の問題へ発展する可能性があります。

子どもたちの間でLINEの「外し」と呼ばれる仲間外れが問題としてとりあげられるようになっていますが、問題の本質はスマホがあることではなく、こうした心理状態やコミュニケーションのスキル（技術）の未熟さが関係しているのかもしれない。コミュニケーションでは、言葉だけではなく、身振り、表情、声の調子など、言葉以外の要素が重要な情報源となります。対人関係に必要な情報の集め方、そしてスキルを習得する機会をどのように作っていくかは、私たち地域コミュニティの全員に共通する課題といえるかもしれません。



## 診療科のご紹介

### 泌尿器科



治療の最前線を  
めざします

部長 田中 良典

「泌尿器」という言葉は皆様にはあまりなじみのない言葉だと思います。腎臓でお小水を作り、尿管をとおして膀胱に運び、お小水を膀胱に一旦貯めて尿道から体の外に出す、という非常に大切な役目を果たしている臓器の集まりが、「泌尿器」です。男性の場合にはこれに前立腺が加わります。また、精巣も泌尿器科で扱う臓器です。

年齢を積むにしたがって様々な機能が低下してくるのは避けられませんが、泌尿器の場合には主にお小水の出方に影響が出てきます。排尿障害といわれるもので、男性なら前立腺肥大による排尿障害、女性なら尿失禁、また男女を問わず過活動膀胱や間質性膀胱炎といったものがあります。尿路結石は昔は比較的若い人の病気と言われましたが、最近は生活習慣病の一つであることが判り、中高年の方が随分増えました。また、西洋式の食生活の影響で腎臓、膀胱、前立腺のがんは増えており、特に前立腺がんは近い将来男性に最も多いがんとなると予測されています。

このように、泌尿器科医が皆様のお世話をさせていただく機会は今後更に増えます。

泌尿器科には現在5名の医師がおり、年間500件を超える手術や抗がん剤治療を中心とする入院診療と、外来診療を行っております。

手術では内視鏡による手術や臓器機能温存手術に努めています。また本年6月から始まる高精度放射線治療は前立腺がんでも大いに期待される新しい治療法です。

治療が落ち着いた方は紹介元の先生にお戻りして治療やフォローアップを継続していただいています。特に前立腺がんでは普段はかかりつけの先生に診ていただき、年1回日赤を受診していただく二人主治医制による地域連携診療を行なっています。

地域医療の拠点病院の泌尿器科として、より一層皆様のご要望に応えるよう努力して参りますので、よろしくお願い致します。

